

CEFR 2.2 言語熟達度の共通参照レベル Common reference levels of language proficiency

テキスト Q.6

国際基準として認められた到達レベルとして、A1、A2、B1、B2、C1、C2の6つに言語コミュニケーション能力を分類している。

- 個人的な到達目標としてだけでなく、教育機関や国のレベルとしても到達目標を設定できる。
- T-series、Cambridge ESOL テストとの相関関係もある。

言語コミュニケーション能力を垂直方向の次元で設定している有用性は次のとおり。

- ・各達成レベルで何が期待できるかを具体的にすることが可能となる。総合的な学習の目標を明確に、現実的にすることができる。
- ・長期にわたる学習を、進歩とともに連続するユニットに分けることが必要である。レベルの枠組みがあれば、シラバスと教材を相互に関連づけることができる。
- ・学習目標をみざす学習努力とユニットを、熟達度との関連で評価することが可能となる。
- ・評価は、偶発的な学習、学外での活動、違う経緯であっても共有できる。
- ・熟達度を共通の基準指標とすれば、異なったシステムや状況においても学習目標、レベル、教材、テスト、達成度を比較することが可能となる。
- ・枠組みが水平方向にも垂直方向にも用意されていれば、部分的な目標も、言語によって能力にばらつきがあっても、部分的に限定された能力であっても認定できる。
- ・目的に合わせて目標が分かるようなレベルとカテゴリで枠組みが構成されていると、監査がしやすい。学習者が領域は違っても適切なレベルで学習しているかどうかの評価がしやすくなる。その学習段階での基準を満たしているかどうか判断でき、個々の言語能力が効果的に発達するように、直近の目標や長期的な目標を定める参考となる。
- ・様々な教育機関で学んだとしても達成度を確認することができる。

但し、注意点として次の3点が挙げられる。

- ・言語学習の過程は持続的であり、個人差がある。(付属書 A 参照)
- ・レベルは垂直方向のみの設定であるが、横へ領域を広げることは可能。
- ・言語の熟達度とレベルとが物差しのように直線的に尺度を持って測ることができるわけではない。

以上